

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 3 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381209

研究課題名(和文)国語科における小中高を通した論理教育カリキュラムと実践プランの策定

研究課題名(英文)Formulation of logic education curriculum and practice plan through elementary, middle and high school

研究代表者

難波 博孝 (NAMBA, HIROTAKA)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：30244536

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小中高を通した論理教育カリキュラムと実践プランの策定のために、2回にわたり小中高の学習者に大規模な調査を行った。その結果、説明文を読むためには、世界認識、筆者認識、自己(=読者)認識、一般的読者認識、言語認識、感情(情動)などが明瞭に区分され、必要なときに呼び出されるように、有機的に関連付けられてネットワーク化されていないこと、しかし、学習者の現状はそうっておらず、また、筆者認識と自己認識とを交差させることが弱いことがわかった。そのため、各認識を交差させるカリキュラムと実践プランを策定することが必須であることがわかった。

研究成果の概要(英文)：In this research, we conducted a large-scale survey on small, middle and high learners twice to develop logical education curriculum and practical plans through small, middle and high school. As a result, in order to read the explanatory text, the world recognition, writer recognition, self (= reader) recognition, general reader recognition, language recognition, emotion (emotion) etc. are clearly distinguished and called when necessary To be organically associated and networked, but the present situation of the learner was not so, and it was found that crossing the author recognition and the self recognition is weak. Therefore, it turned out that it is essential to formulate a curriculum and a practical plan that cross each recognition.

研究分野：国語科教育

キーワード：説明文 論理 論証 小中高 認識

1. 研究開始当初の背景

(1) 教育実践上の背景

2011年度から新しい学習指導要領が実施され、言語活動の本格的な導入とともにすべての教科において、思考力・表現力・判断力の育成が求められるようになってきた。しかしながら、各学校では、言語活動をどのように設定すればいいかについての迷いも多い。このようなことが起きている背景の一つは、言語活動によって培われることが期待されているはずの、思考力・表現力・判断力の内実が明確ではないことが挙げられる。例えば、思考力を培うといっても、どのような力を伸ばせばいいかが明確でなく、その力を伸ばすための言語活動も設定できないのである。

実は、学習指導要領国語編では、この思考力について「思考力(中略)とは、言語を手掛かりとしながら論理的に思考する力(中略)である。」と明確に述べられている。つまり、思考力とは論理的思考力のことであり、それを、言語活動を含む教育実践において育むことが求められているのである。まずは、各学校現場がこのことを把握し、言語活動を設定することが必要である。

しかしながら、上のような教育実践を行うには困難な問題がある。それは、国語科あるいは学校教育全体において論理的思考力とはなにか、また、論理的思考力を育むためのカリキュラムはなにかについて、現在の日本の学校教育では、一定のコンセンサスが得られていないからである。

(2) 研究上の背景

国語科において、2000年度から国語科教育に関する雑誌掲載論考における「論理」・「論理的思考」概念を調査した幸坂(2012)によれば、対象とした540論考における「論理」「論理的思考」概念が多岐にわたっている一方で80%近くの論考(422論考)が定義をせずに論述をしていた。つまり、国語教育研究上においても、「論理」「論理的思考力」に関する一定のコンセンサスが得られておらず、コンセンサスが得られていないという意識も低いということが窺える(幸坂健太郎(2012)「国語科教育に関する雑誌掲載論考における「論理」・「論理的思考」概念の調査」『国語科教育』72)。

早くから言語論理教育の研究を行ってきた井上尚美の一連の研究は、論理を以下のように定義している。形式論理学の諸規則に従った推論のこと(狭義)筋道の通った思考、つまり、ある文章や話が論証の形式(前提—結論、または主張—理由・根拠という骨組み)を整えていること直感やイメージによる思考に対して、分析、総合、抽象、比較、関係づけなどの概念的思考一般のこと(最広義)

しかし、「論理」をいくつかのカテゴリーに分けて分類したにもかかわらずそのすべてを再び「論理」としてしまったため、彼が提案する実践は、論理の授業と言うよりは、

国語科授業全般の新しい提案となっている。このことも、国語教育研究において、「論理」「論理的思考力」に関する一定のコンセンサスが得られていない結果でもあり、その後の実践や研究の混乱を生み出す原因ともなっている。

このような研究上の混乱を抜け出すために、既にいくつかの研究成果が提出されている。難波博孝は、論理や論理的思考力を「因果関係」に絞ること、その因果関係の置かれた文脈によって、「議論の論理」「説明の論理」「感化の論理」に分けること、井上の言う「最広義の論理」を「結束性」と呼ぶことを提案し、混乱を避けようとしている。

また、青山之典は、小学校に関して、アメリカの説明文教育のカリキュラムにならって、論理や論理的思考力をいくつかの「strand(下位項目のつながり)」に分けてスパイラルにかつ系統的に教育することを提案しており、また、論理的認識力という新しい概念によって、論理の教育の内容を再構築しようとしている。さらに、吉川芳則は、小学校における説明的文章教育の成果と課題を踏まえた実践的提案を、宮本浩治は中学校高等学校における評論文教材の教育の成果と課題を踏まえた実践的提案を行っている。

しかしながら、これらの研究は、それぞれの研究者が独自で行っており、また、難波博孝を除いて小中高を連関させた研究は少なく、研究の成果と課題を交流し共同的な形での研究は不十分である。このような研究上の混乱を抜け出すためには、小中高を一貫させ、共同で研究を行うことが重要である。また、そのことは教育実践上も求められていることである。

2. 研究の目的

で示した、教育実践上の、また、研究上の課題を打破するためには、論理あるいは論理的思考力を定義し、カリキュラムを小学校～高等学校の教育全体を見通したものと整え、かつ、実際に実践で試行することが必要となってくる。一方で、そのカリキュラムは絵空事ではなく、実際の現場で使用可能なものでなければ、現在言語活動をどのように行っていくかで悩んでいる教育現場では役に立たない。しかも多忙を極める教育現場においては、ただ新しいことを押し付けるといったイメージを与えるのではなく、日々の実践の改善につながる、効力と効力感があり、かつ、無駄な労力と労力感が少ないものでなければならない。

そのために、本研究では、研究期間内に次のことを行う。

A: 日本の国語科教育における、研究上および実践上の、論理教育(論理および論理的思考力の教育を総称してこう呼んでおく)の達成水準を確認すること

B: 諸外国の国語科教育における、研究上および実践上の、論理教育の国際的動向を確認

すること

C：論理・論理的思考力について、実践上も研究上も一定のコンセンサスが得られるような定義付けを行うこと

D：論理教育の目標について、実践上も研究上も一定のコンセンサスが得られるような定義付けを行うこと

E：小中学校12年間の、論理教育のカリキュラムを策定すること

F：論理教育のカリキュラムを実行するための、効力があり無理なく実行できる実践プランを策定し試行し修正すること

3. 研究の方法

2014年度は、日本および海外における、論理教育に関する実践上および教育上の達成水準を確認し、統合する。具体的には、研究代表者および研究分担者の研究を持ち寄ること、および、その他の研究者の達成水準を調査し統合することを行った。

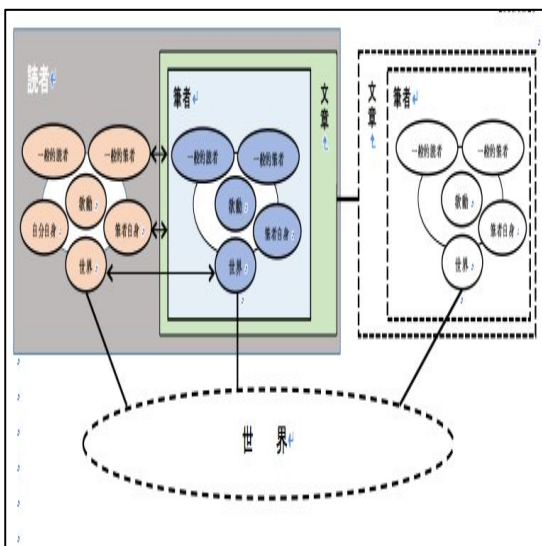
2015年度は、カリキュラムを作成するための準備として、小学校2年生、6年生、中学校2年生、高等学校2年生、合計500名に対して、小学校1年生レベルの文章を読解させる調査(調査1)を行った。

2016年度は、調査1の結果を受け、文章のレベルを上げ、小学校6年生、中学校2年生、高等学校2年生に、中学校3年生レベルの文章を読解させる調査を行った。

これらの調査を受けて、説明的な文章を「より良く読解する」とはどういうことか、そのために、どのような読みのプロセスを経る必要があるかということについての理論の構築を行った。

4. 研究成果

小学校1年生レベル、中学校3年生レベルの同じ文章を使って調査することに拠って、語彙や文章の難易の要因を取り除いた、説明的な文章を「より良く読む」ための実践理論を図のように構築することができた。



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計20件)

1. 幸坂健太郎, 国語科で指導される言語論理の感情的側面の検討 「感情論理」(L・チオンピ)の理論を援用して, 語学文学, 55, 2016, 33-45, 査読無
2. 青山之典, 説明的文章の難易度を定める要因(1) - マクロとミクロの視点から捉えられる構造に焦点をあてて -, 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, 第7号, 2016, 41-50, 査読無
3. 篠崎祐介, 説明的文章教材の配列方法の検討 計量的な分析手法を用いて, 全国大学国語教育学会発表要旨集, 131, 121-124, 2016, 査読無
4. 難波博孝, 第三項理論に拠る教育・授業: 合言葉は F 続き, 日本文学, 65(3), 15-27, 2016, 査読有
5. 難波博孝, 未来の国語教育の方向性, 国語教育思想研究, 12, 11-14, 査読無, 2016
6. 高橋由衣・宮本浩治 「読みの深まりを目指した授業づくり: 他者性の獲得に着目して」 『大谷大学国語教育研究』(3) 12-25 大谷大学国語教育学会 査読無 2016年
7. 幸坂健太郎 「国語科で指導される言語論理の感情的側面の検討 「感情論理」(L・チオンピ)の理論を援用して」 『語学文学』(55) 33-45 北海道教育大学語学文学学会 査読無 2016年
8. 難波博孝 「合言葉は F」 『日本文学』64(8) 16-31 日本文学協会 査読有 2015年
9. 篠崎祐介 「アクティブ・ラーニングによる文章表現指導の研究 大学初年次教育科目における実践を基にして」 『リメディアル教育研究』Vol.10 No.2 160-170 リメディアル教育学会 査読有 2015年
10. 吉川芳則 「思考力を育てるアクティブな国語授業づくり 思考力の具体を意識した授業づくりへ」 『教育科学国語教育』No.789 36-39 明治図書 査読無 2015年
11. 幸坂健太郎 「説明的文章の論理の読みにおける<専有>論: 学習者理解のための概念装置の提案」 『札幌国語研究』20 47-62 北海道教育大学 査読無 2015年
12. 幸坂健太郎 「論説・評論を自分ごとにする国語科の読みの指導理論 学習者の読みの「構え」の形成を中心に」 『国語教育思想研究』11 21-32 査読無 2015年
13. 難波博孝 「「日常の論理」の教育のための準備: 論証/説明/感化の論理の区別とその内実」 『初等教育カリキュラム研究』(2) 49-61 広島大学初等カリキュラム開発講座 査読有 2014年
14. 宮本浩治 「国語科における授業と評価の実際」 『中等国語教育』375-393 協同出版

査読無 2014年

15. 篠崎祐介「社会形成に資する読むこと
の教育に関する考察」『国語教育思想研究』8
97-104 国語教育思想研究会 査読無 2
014年

16. 篠崎祐介「教材としての「評論文」を定
義する「アブダクション」によって「ディ
スクルス」を志向する文章」『教育学研究ジ
ャーナル』第13号 11-19 中国四国教育学
会 査読有 2014年

17. 篠崎祐介「森田信義の説明的文章指導論
の変遷」『国語教育思想研究』9 29-36 国
語教育思想研究会 査読無 2014年

18. 篠崎祐介・幸坂健太郎・黒川麻実・難波
博孝「評論文読解指導の現状と課題 高等学
校教員に対するフォーカスグループインタ
ビューから」『国語科教育』77 70-77 全
国大学国語教育学会、査読有 2014年

19. 青山之典「説明的文章の授業における『論
理的認識力』設定の意義」『国語教育思想研
究』8 65-74 国語教育思想研究会 査読無
2014年

20. 青山之典「間テキスト性に着目して、表
現主体の背景を想定することの意義 説明的
文章の読みの指導に焦点をあてて」『比
治山大学現代文化学部紀要』第21号
131-142 比治山大学現代文化学部 査読無
2014年

〔学会発表〕(計5件)

1. 吉川芳則「説明的文章の批判的読みの学習
活動開発の視点」全国大学国語教育学会第1
31回、2016.10.15.白百合女子大

2. 篠崎祐介「説明的文章教材の配列方法の検
討 計量的な分析手法を用いて」全国大学
国語教育学会第131回、2016.10.15.白百
合女子大

3. 難波博孝・幸坂健太郎・篠崎祐介・吉川芳
則・宮本浩治・青山之典「説明文読者の論理・
認識の様相 小中高学習者への調査から」
全国大学国語教育学会第130回、
2016.5.29.新潟大学

4. 青山之典「中学校説明的文章教材の分析と
考察 論理的認識力に焦点をあてて」全
国大学国語教育学会第129回、2015.10.24.
創価大学

5. 吉川芳則「説明的文章の批判的読みの授業
づくりへの手がかり 習得初期段階の若手
教員の場合」全国大学国語教育学会第1
29回、2015.10.24.創価大学

〔図書〕(計7件)

1. 吉川芳則「教科教育学研究の可能性を求
めて」316ページ 風間書房、2017

2. 吉川芳則「主体的な<読者>に育てる小学
校国語科の授業づくり 辞典類による情報
活用の実践的方略」144ページ 明治図
書、2016

3. 吉川芳則「アクティブ・ラーニングを位
置づけた中学校国語科の授業プラン」136ペ

ージ明治図書、2016

4. 吉川芳則編著『アクティブ・ラーニングを
位置づけた中学校国語科の授業プラン』明治
図書 134ページ 2016

5. 中渕正堯・吉川芳則編著『主体的な<読者>
に育てる小学校国語科の授業づくり 辞典
類による情報活用の実践的方略』明治図書
143ページ 2016

6. 難波博孝・幸坂健太郎・妹尾知昭・篠崎祐
介・本渡葵『1日10分 言語力ドリル「読む」』
改訂5版、第一学習社 48ページ 2015

7. 宮本浩治「読むことの学習における教師の
役割 指導言によって形成される読みの多
様性と学習の深まり」『国語教育学研究の
創成と展開』357-366 漢水社 2015

6. 研究組織

(1)研究代表者

難波 博孝 (NAMBA HIROTAKA)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：30244536

(2)研究分担者

青山 之典 (AOYAMA YUKINORI)

福岡教育大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：00707945

宮本 浩治 (MIYAMOTO KOUJI)

岡山大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：30583207

吉川 芳則 (KIKKAWA YOSINORI)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：70432581

幸坂 健太郎 (KOUSAKA KENTAROU)

北海道教育大学・教育学部・講師

研究者番号：20735253

篠崎 祐介 (SINOZAKI YUUSUKE)

立正大学・社会福祉学部・特任講師

研究者番号：60759992